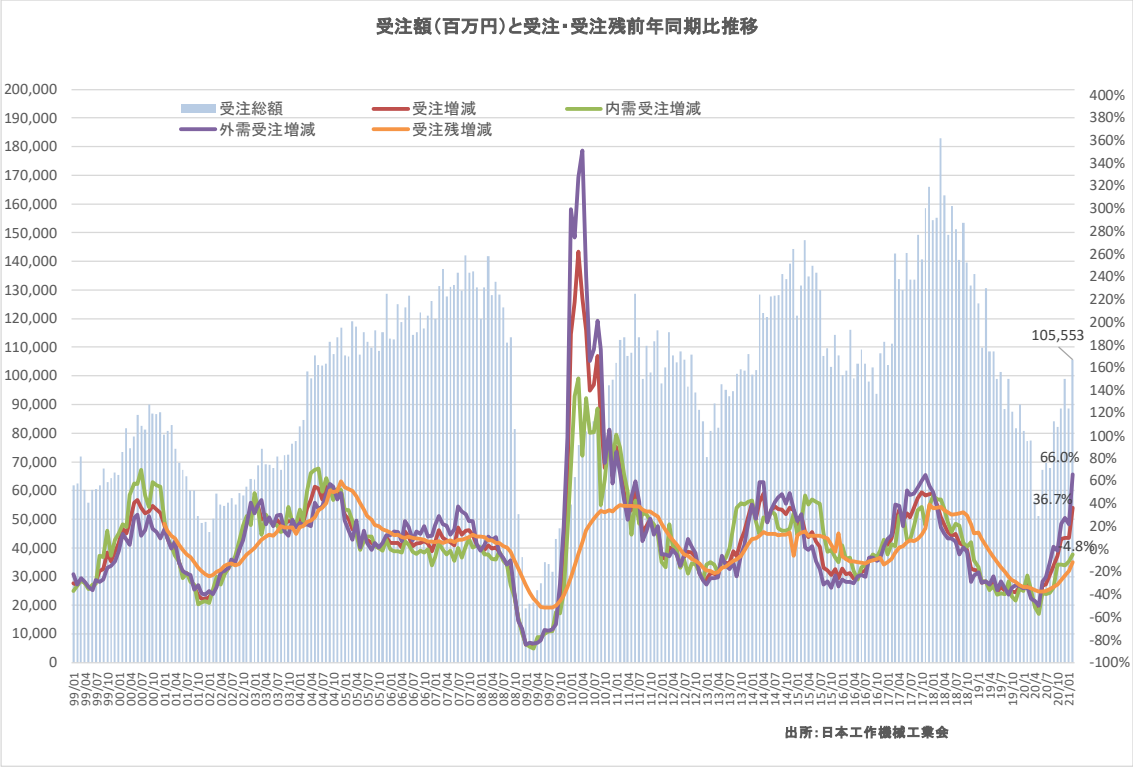
工作機械工業会 2 月受注速報　2 月は 1055 億円（36.7%増）と 19/7 以来の 1000 億円超え

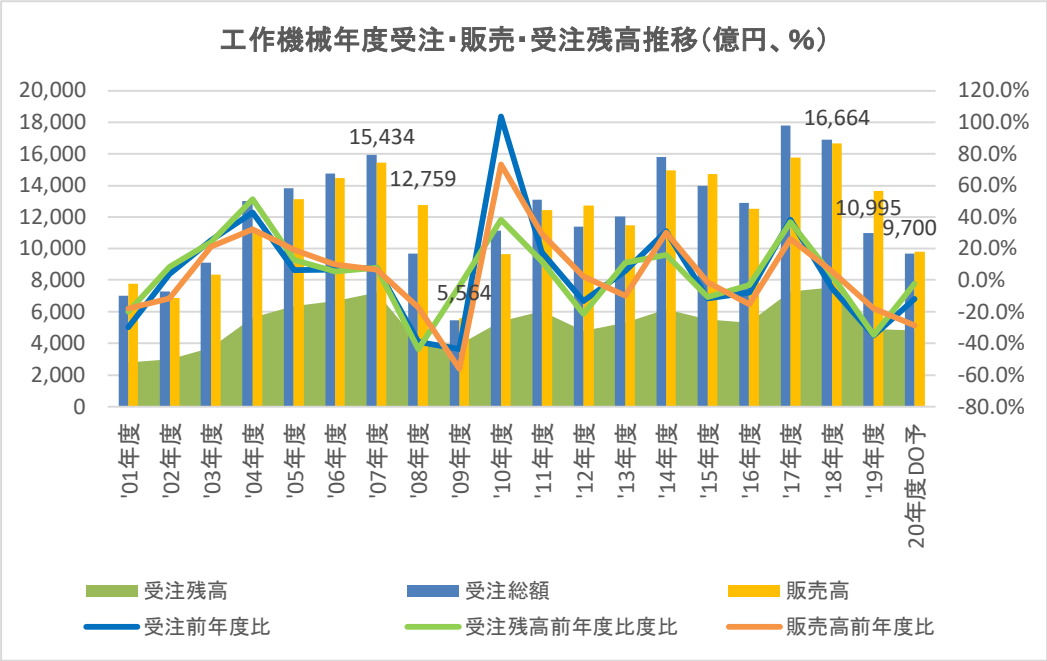
2 月受注は 36.7%増 1055 億円と 4 ヶ月連続で同月比増、19/7 以来の月次 1000 億円超え

3/9 の 15 時に日本工作機械工業会の 2 月受注速報が開示された。2 月受注は前年同月比 36.7%増の 1055 億円と、4 ヶ月連続で前年同月比プラスとなり、19/7 以来、好不況を分ける 1000 億円超えとなった。



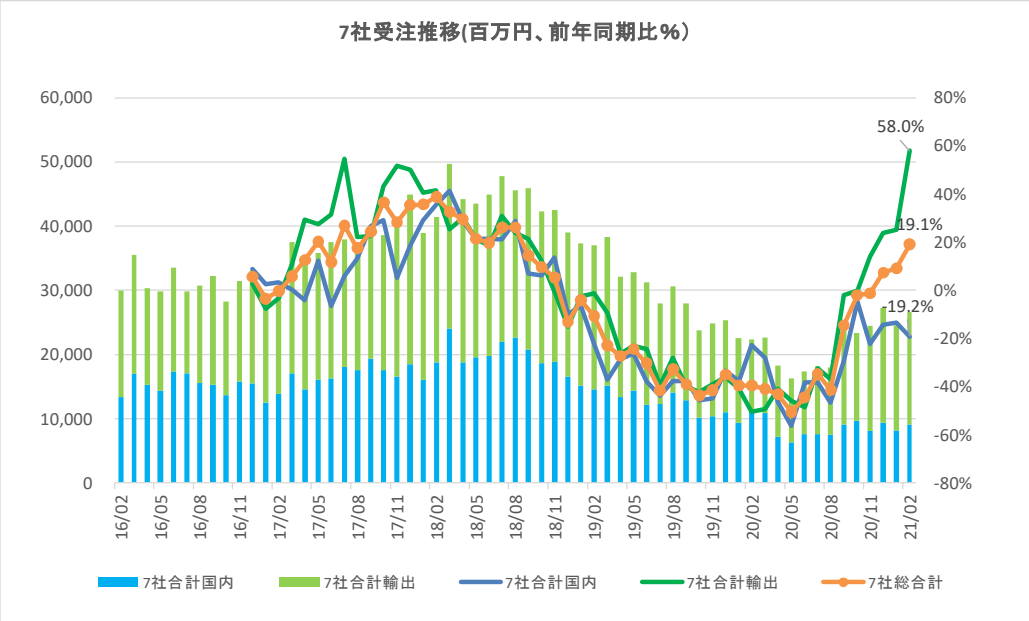
内訳は内需が 304.62 億円（4.8%減）で 27 ヶ月連続減、前月比では 15.4%増と、再度 300 億円を超えてきた。一方外需は 751 億円（66.0%増）、前月比でも 20.7%増と昨年の中国のロックダウン（20 年 2 月は 48%減の 70 億円）の反動増、今期は春節でも工場稼働で需要拡大が寄与、相乗効果が寄与している模様で、19/3（767 億円）以来の 700 億円超えに。国内は自動車販売回復の影響が続いているものの、緊急事態宣言継続などもあり、なかなか急増とはいかない環境と考えられる。また製造業中心に業績の増額修正が相次いでいるが、本格的な能力増強投資は半導体製造装置や電子部品など限られた業界に止まり、重工業などでは工場閉鎖のアナウンスもあり、回復が限定的な状況にある。外需は中国の好調、あとは全体として内外での半導体、電子部品製造、5G に関わる業界向けなどが寄与している模様。但し、欧州でのロックダウンで 2 月の欧州自動車販売が大きく減少、米国も芳しくなく、本格的な受注拡大には時間を要すると見られ、依然として、中国一本足打法での回復が続こう。

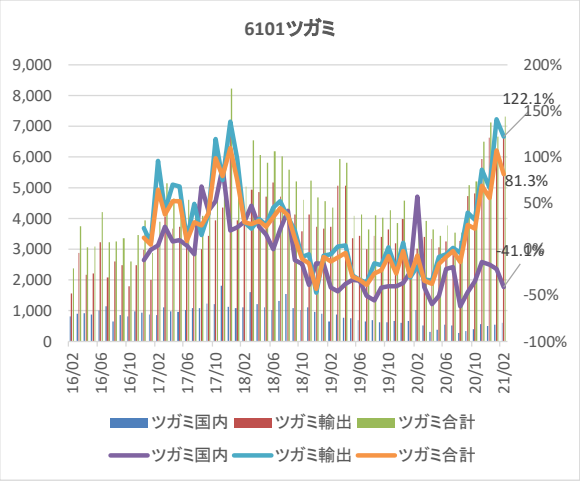
この推移で 3 月は期末でもあり 1100 億円程度の受注が見込まれる。2020 年度は全体で受注高 9700 億円（11.6%減）程度が想定され、暦年の 9018 億円（26.7%減）と比較し、緩やかながら年明けからの回復が寄与していると見られる。

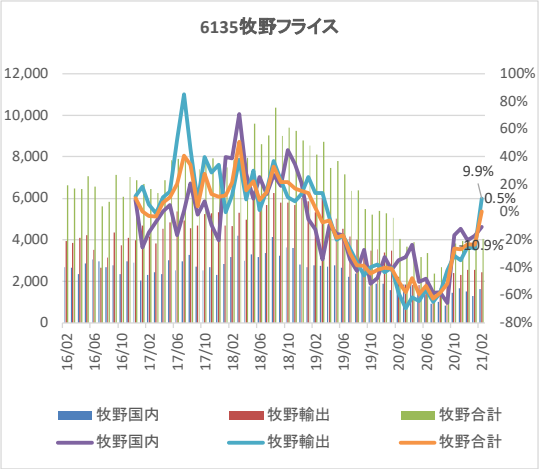


主要 7 社の 2 月受注は 19.1%増の 266 億円と 3 ヶ月連続プラス、6 社プラスも跛行色

日刊工業新聞がまとめる主要工作機械 7 社の 2 月受注実績（3/10 発表）は 266 億円（19.1%増）となり、3 ヶ月連続プラス、6 社がプラスも、工業会の伸びを下回る。内訳は輸出が全社プラスで 175 億円（58%増）、国内 91 億円（19.2%減）。個別では差があり、中国主力のツガミが 73.16 億円（81.3%増）、日本電産子会社となった三菱重工工作機械 14.16 億円（51.9%増）に対し、航空機などに強い牧野フライス製作所が 40.52 億円（0.5%増）、芝浦機械 12.40 億円（25.7%減）など跛行色がある。また輸出 2.2 倍のツガミを含め、7 社中 4 社が国内向けはいずれも 2 ケタ減で、国内は 19.2%減と厳しさが見られる。

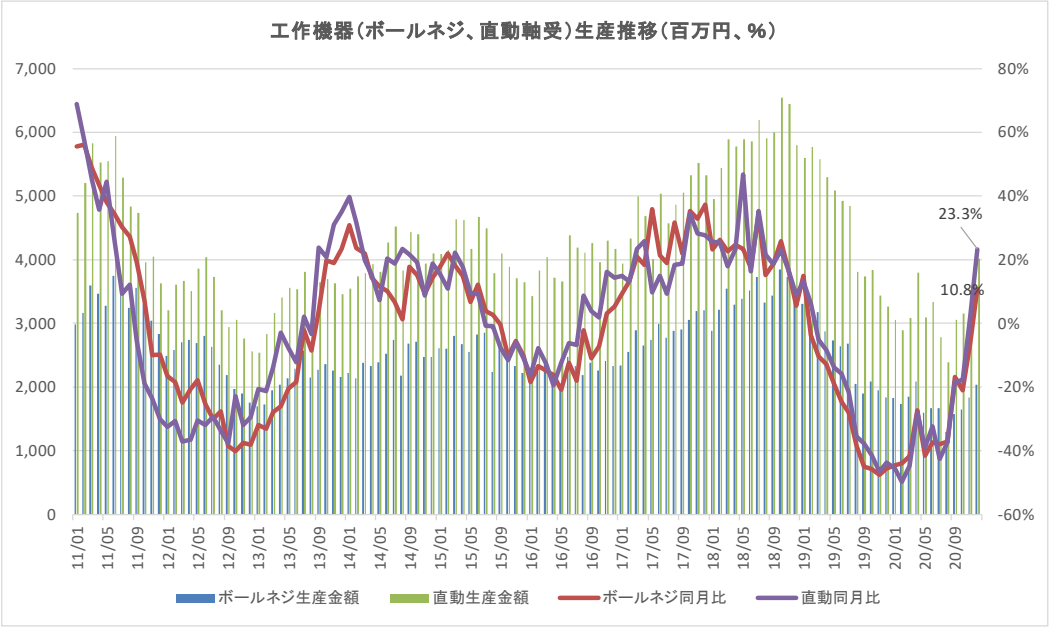


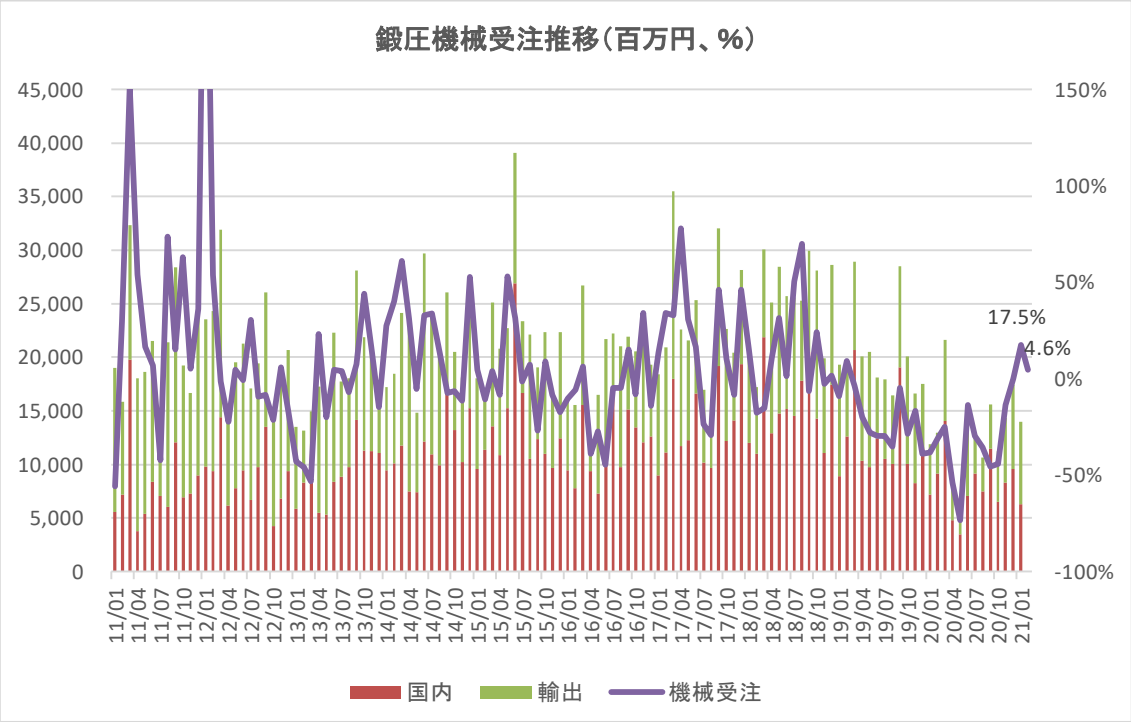




工作機械関連機器の工作機器生産、126 億円（11%増）と 19 年 3 月以来の同月比プラスに

工作機械に関連する工作機器も、日本工作機器工業会が 3/9 に発表した 21 年 1 月の生産額が 125.83 億円（11%増）と、19 年 2 月以来 23 ヶ月ぶりに同月比プラスとなった。主力ボールネジが 2 ヶ月連続プラスで前年同月比 19%増の 21.9 億円、直動軸受 3 ヶ月連続で同月比プラス、39%増の 42.4 億円となった。これらの機器は受注急回復している半導体製造装置向けやマテハン搬送などでも利用され、他の工作機器と比較し、いち早く回復してきたと言える。直動主体の THK,日本トムソンとも受注回復が著しい。



金属加工機械として鍛圧機械受注も 2 ヶ月連続同月比プラス、1.6%増の 135.6 億円に

工作機械と同じ金属加工機械として、鍛圧機械の受注も漸く回復の数字が出てきた。3/8 に発表された日本鍛圧機械工業会の 2 月鍛圧機械受注は、機械全体で前年同月比 1.6%増の 135.58 億円と 2 ヶ月連続でプラスに。但し国内は 89.06 億円（2.6%減）と 3 ヶ月連続マイナスと低調。電機が 26.3%減、自動車が 6.1%減、金属製品製造 13.8%減など、その他が 3.8 倍増も跛行色がある。輸出は 46.52 億円（21.8%増）と 3 ヶ月連続プラスに。内訳は台湾・韓国向けが 5 倍増、中国が 4 倍増も、北米 63.2%減とこちらも跛行色がある。機種別内訳はプレス機械が 70.30 億円（7.8%増）と 3 ヶ月連続増、板金機械は 65.28 億円（1.3%増）と 17 ヶ月ぶりにプラスに転じた。